



愛知県豊橋市立岩西小学校

〒440-0841

愛知県豊橋市西口町字西ノ口
25番地の4

TEL: 0532-61-2557

<http://www.iwanishi-e.toyohashi.ed.jp/>



豊橋市の東南部に位置する岩西小。市内では、多米小・岩田小に次いで外国人児童が多い。そうした児童の実態をふまえ、家庭や通学区域の現状と将来の展望に立ち、知・徳・体の調和が取れた、たくましく生きる児童の育成を目指している。児童数555名、寺部守彦(てらべ・もりひこ)校長。

保護者も地域も巻き込んで 外国人児童支援のかたち

近隣に建つ工場などの影響で、
増加の一途をたどる外国人児童。

編入学してくる子も、またその保護者も、
日本語の理解には遠い位置にいる。

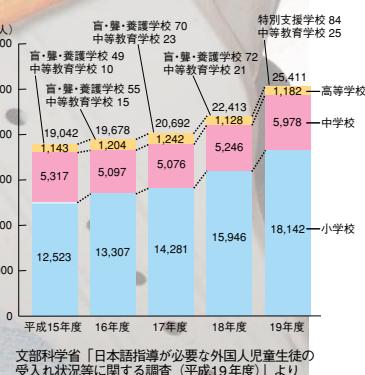
求められるのは、学習における支援と
日常生活のバックアップ。

ブラジル人児童を多く抱える
岩西小を取材した。

取材：細江智子・西尾真澄／撮影：西尾琢郎



文科省の平成19年度調査によると、公立学校に在籍している外国人児童生徒約7万人のうち、日本語指導を必要とする者は25,411人（平成18年度22,413人／対前年度13.4%増）。学校種別では、小学校が18,142人（対前年度13.8%増）、中学校5,978人（同14.0%増）、高等学校1,182人（同4.8%増）となっている。都道府県別に見ると、愛知県が最も多く、次いで静岡県、神奈川県、東京都、三重県の順。母語別では、ポルトガル語10,206人、中国語5,051人、スペイン語3,484人となっており、この3言語で全体の7割以上を占めている。また、日本語指導が必要な外国人児童生徒が在籍する公立学校数は5,877校で、前年度5,475校より7.3%増となっている。



学校と地域と外国人 つなげるボランティア

児童数555名のうち、外国人児童は474名。その半数以上がサマースクールに日々通う。岩西小の国際担当教員は4

保護者の意識を高め 児童の意欲を高める

「外国人の子どもたちにも、夏休み期間に何かを作り上げる充実感と、作品展を飾る喜びを味わってほしい」と



ボランティアの協力で、一人ひとりに手がかけられる。「初日は恥ずかしがっていた子どもが、声をかけてくれるようになってうれしいです」とはボランティアの学生さんの声。外国人をもっとよく知りたい、仲良くなりたいボランティアに応募する人も。

午前中の2時間で 自由課題に取り組む

「そうすると答えるは、トレセントストリエンタクワットロ。言つてみて」
エンタクワットロ。言つてみて
一字一字、数字を指さしながらポルトガル語で読み上げる先生。それに続く児童。「……トレセントストリエンタクワットロ」「サンビヤクサンジュウヨン」「……サンビヤクサンジュウヨン！」
「できたね！ 次もやってみようか」
額と額をくっつけるようにして、問題を解いていく。その隣では漢字の練習に取り組む子ども。絵日記を書いている子や、絵の具を手にボスターを仕上げている子もいる。県名カルタに挑戦するグループはなかなかにぎやかだ。

岩西小のサマースクールは、夏休み前半の7月24日から30日まで、後半の8月27日から29日まで開催される。外国人児童は夏休みの宿題を持ち寄り、午前9時から2時間、低・中・高学年に分かれそれぞれ支援を受ける。完全に自由参加だ。

「水やりたい、ではなくて、水飲みたい、と言つてんだよ」「水飲みたいーー！」
「水を飲むのは休み時間にね。あと5分がんばろう」
チャイムが鳴った。みんなバラバラのことをしていても、一齊に起立、礼をしてスクールを終える。

に増えていった。

「言葉の問題で子どもの宿題をサポートできない保護者も、サマースクールで対応してもらえるなら……と、意識が高まってきたんですね」

日本人の子どもたちと同じように、夏休みの宿題に丸をもらう。同じ棚に作品を並べる。外国人児童のモチベーションの高さは、想像するに難くない。



ポスターを描きながら、日本語と日本の習慣も理解する。

多い年には年間100件を超える転出入の数。母国へ帰る子、近隣のブラジル人学校へ移る子、再び戻る子……等々。在校期間も時期も、事情もバラバラ。計画的にじっくり腰を据えての指導は難しく、一人ひとりの能力や事情に合わせた対応力が求められる。経験豊かな国際学級教諭、ブラジルの事情にも明るい教育相談員、そして今まで培ってきた教材があつてこそ、この体制を可能にしている。

「姿勢」を身に付ける

「頭の上を言葉が通り過ぎて、お客様のように座っているだけで授業時間が過ぎてしまうんですよ」

入ってきたばかりの子どもについて、鈴木先生はこう表現する。

1990年に初めてブラジル人児童が編入し、2年後には17名に増加。その年、国際学級が設置され、体育、図工など技能系の授業は通常学級で学び、国語・社会などの教科は国際学級で学ぶとしなければならない」という意識がない子どもも多かったという。

「4年前に始めた当初は、参加する子どもが一ヶタだった日もありました」

ボルトガル語での学級通信や学校便り、充実の独自教材など、学校側の意図や創意工夫が保護者側に浸透し始めるにつれ、サマースクールへの参加者も徐々

生の力も大きい。授業の補助はもちろん、言葉の壁からおこる日本人の子どもとのトラブルをおさめたり、連絡帳や保護者に配布するプリントを翻訳したりと大活躍だ。

「子どもがストレスで混乱したときに、すぐに話を聞いてあげることで大半は落ち着きます。混乱した理由を尋ね、一つひとつ原因を取り除いていくことが大切ですね」と高橋先生は語る。

「プレクラス」で日本の学校生活を学ぶ

問題となるのは「言葉だけではない。朝礼で皆が並んで静かに先生の話を聞くといつた、日本では当たり前のことも、彼らにとっては当たり前ではないのだ。

朝礼、給食、掃除。外国人児童にとつて、日本の学校での集団生活は、言葉や勉強以前に戸惑うことばかり。これに対処するため、岩西小では、日本に来たばかりで何も分からぬ子どものために「プレクラス」を設けている。1カ月間、マンツーマンで、日本の生活に溶け込むように指導する場だ。

一方、保護者との信頼関係を築く努力もなされている。4月には国際学級担当と通訳による外国人説明会が行われ、6月にも地区別懇談会での説明会を行っている。PTAには国際部を設置し、日本語とボルトガル語の両方が話せる保護者

でこそ、相互理解も深まります」

そう話すのは寺部校長。岩西小に赴任した当時は、文化的違いに戸惑ったと言う。だが、受け入れ、育てる基本に、日本人児童との差異はない。

今後は通訳のできる教育相談員の増員や、国際担当教員の育成などを考えていいく。

豊橋市には、市の高校を卒業し、教育相談員になつて通訳の仕事をしているブラジル人もいる。このようなバイリンガル・バイカルチャーカーの人材が、これから社会にますます必要となるだろう。

外国人児童には、そつした将来の可能性がある一方、高校を受験できるレベルの日本語力を取得するには、かなりの努力が必要となるのもまた現実だ。

「中学校に入つてから高校進学の現実を知るのでは遅いのです。小学校のうちから準備しておかないと」

岩西小での学校生活が未來への道となるよう、寺部校長はじめ先生方や地域ボランティア、そして保護者が一同となつて強力なバックアップ体制を整えている。それは日本人・外国人と隔てることのない学びにつながり、ひいては真の国際化への一步となるのだ。

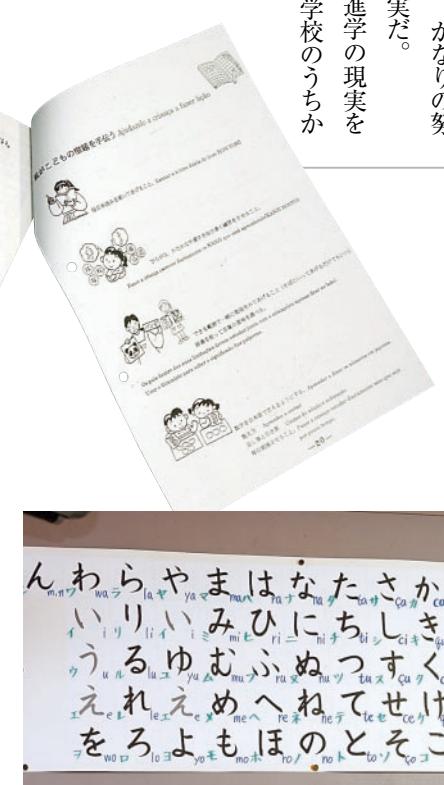
日本人・外国人を隔てず

「ブラジルから研修に エリ先生奮闘中」

本年度は、自治体職員の協力事業として、ブラジルからエリ先生ことエリエーネ先生が研修に訪れている。6月から11月までの6ヶ月間、日本語をイチから勉強しつつ日々奮闘中だ。サマースクールでも、エリ先生は日伯の架け橋として指導にあたつていて。

帰国後はパラナ州の教育現場に戻り、日本での経験を生かしたいと言ふエリ先生に、お話を伺った。

「岩西小の印象は、



外国人説明会の配付資料。学用品の説明は絵入り、連絡帳に書いたための日本語の例文もあるなど、外国人保護者への配慮にあふれている。



教室内の掲示。ca. qui. cu……と、ローマ字ではなくボルトガル語が添えられている。